



故正宗巖敬先生 (Dr. Genkei Masamune, 1899~1993)  
The Founder of Our Society and the Journal (formerly,  
The Hokuriku Journal of Botany) in January, 1952.

旧年末、“正宗先生追悼文集”を刊行した。そのあとがきに、私は正宗先生を巨象にたとえて、御投稿下さった方々の追悼文は「象の太い足を、長い鼻を、大きな耳を、小さな目を記述して下さって居りますが、併合してみると、巨象の全体像がしめされると存じます」と書いた。

この中で、幾人の方は大学内での先生に近寄り難い感を抱いていたと述べられているが、私も先生の下で勤務させていただいた14年間を通じて、全く同感であった。

しかし、先生は他人に厳しさを求められたが、それだけにむしろ、御自身に厳しく処しておられたのではあるまいか。一例に過ぎないが、教室内での一日の御行動は御住居と学校の距離が近いとは言え、8時に出勤され、御帰宅は仕事の途中であっても打

ち切って17時に引き上げて行かれるというように、印を押す如く正確で、私どもは「教室の時計だね」と評言したほどであった。これに反し、野外に出ると、対称的に別人のような温和な姿を見せ、楽しそうに歌を唱っておられる。こういう時に拝聴した雑談は貴重な思い出として残っている。

先生の学問上の御業績については周知のところ故、省略するが、晩年、「屋久島石楠花」と題する小説を執筆されていたこと、また、焼物に興味を持たれて、写真で見られるような多くの作品を残されていることなどは先生の隠された御才能の一端であって、それぞれは天下に名を残された御兄弟である正宗白鳥・正宗猪一郎・正宗得三郎氏との御血縁というものであろうか。

次に是非とも御披露しておきたいことは御子息正

宗行人さんから見せていただいた先生への御来信の束である。これを拝見していて、先生は小学校の頃から植物採集に熱中して、中学校時代には既に日本植物学会々員であったこと（小泉源一先生、大正5年12月31日書簡）、岡山中学より東京の中学に転校して植物の勉強をしたいと牧野富太郎先生に相談したのであろうが、その無謀を諭されていること（牧野富太郎先生、大正5年9月18日葉書）、検定を受験して中学校で博物を教えることを考えられたのであろうか、検定について児玉親輔先生に質問しておられること（児玉親輔先生、大正6年1月2日書簡）等々、御存命中に拝聴したことのない先生の逸話を知り、感銘を受けた。

（里見信生）



A, 備前蘭図茶碗。B, 備前徳利。両者とも快心の作と思われる。茶碗には“厳”の銘が入り、徳利には“正宗己作”と箱書してあることから容易に推察できる。C, 九谷蘭図皿。D, 色紙。揮毫をお願いしても仲々応じられなかった。したがって、この色紙は数少ない珍品である。世間では先生の字を悪筆と称したが、毛筆の字は御覧の通り、御性格のにじみ出た良筆である。